

学校を
創る

『みんなでつくる笑顔の学校』 を目指して



八千代市立新木戸小学校長 **しゅうら 重智 栄浦**

1 はじめに

『みんなでつくる笑顔の学校』

新任校長として着任した昨年4月、子供たちの可能性を拓くために、学校づくりのキャッチフレーズとして掲げたものである。

「みんなでつくる」とは、学校はただそこにあるだけのものでなく、学校職員・児童・保護者の方々・地域の方々等、学校に関わるたくさんの人が手を取り合ってつくっていくものという意味である。時代とともに学校も成長していかななくてはならない。

「笑顔の学校」とは、目の前にいる子供たちが笑顔でいることはもちろん、将来社会に出ていっても、自分の可能性を拓き、笑顔で過ごしてほしいと考えたからである。

子供たちが今も将来も、「笑顔」で過ごしていくためにはどんな「力」や「心」が必要なのかを考え、次の「3つの力」と「たった1つの約束」を意識した教育活動にこだわっていくことにした。

「3つの力」

- ・自分の考えをもつ力
- ・自分を表現する力
- ・目標をもってトライする力

「たった1つの約束」

- ・人を大切にする

この「3つの力」と「たった1つの約束」は子供たちだけでなく、本校の職員が笑顔で仕事をしていくための「力」や「心」でもある。職員とともに「3つの力」と「たった1つの約束」を意識しながら士気を高め、やる気と笑顔のあふれた職場環境をつくっていくことを大切にしている。

2 みんなでつくる笑顔の学校づくり

(1)「みんなでつくる学校」にするために

管理職が学校経営の方針を、職員はもち

ろん、保護者や地域の方に積極的に発信することが大切である。「こういう教育の効果をねらってこんな取組を行い、子供たちにこんな効果が出ている」ということを伝えるようにしている。発信することが、子供たちや学校の状況をしっかりと見ていこうという管理職の姿勢にもつながるのである。

①ホームページの毎日の更新と、週1回の校長室便りの発行

笑顔いっぱい

八千代市立新木戸小学校
《校長室便り》
発行：校長 栄浦 重智
平成30年度 第6号
平成30年 5月18日

「人と関わること」で学ぶこと

人は人との関わりを通して様々なことを学んでいます。かつては上学年の子が下学年の子をいたわり、守る。下学年の子は上学年の子に感謝し憧れをもつということが子供同士、兄弟姉妹の交流の中で、遊びを通して自然にできていたと思われています。

近年、社会の変化や少子化の影響から、友人関係の在り方に未熟さやゆがみが表れたりするなど、児童の「社会性」をめぐる問題が叫ばれています。今の子供たちの問題は「人と関わりたい」という意欲の低下にあるのかもしれません。

新木戸小では昨年度から満席において縦割りの活動を取り入れています。上学年の子がリーダーとなり、下学年の子と一緒に掃除に取り組みしています。運動会でも2学年合同の競技もあります。掃除のときはお互いの演技を見合い、アドバイスし合う姿が見られます。また、週1回、鬼っ子タイムに「仮のよしの日」を設け、上学年と下学年で楽しく遊ば交流活動も予定しています。

先日、1・2年生の「学校探検」がありました。2年生の子が1年生の子に、学校の中のいろいろな教室等を案内するものです。ここで興味深かったのが2年生の表情です。1学年しか変わっていないのですが、案内をしているときの2年生はしっかりした「お兄さん」「お姉さん」の顔になっていたという事です。1年生をいじりながら優しく学校を案内する姿は、凛々しささえ感じられました。(昨年は逆の立場だったのですが・・・)1年生も初めての学校探検なのですが、頼りになる2年生に手を引かれ、笑顔で学校探検を楽しんでいました。子供たちはお世話された経験を生かし、成長の過程で今度はお世話する体験を積んでいきます。上学年の子は「役に立った」「お手本になった」という自己有用感を、下学年の子は「あんなお兄さん、お姉さんになりたい」というあこがれの気持ちをもってほしいと思います。

除障作業 ありがとうございます。

5月12日(土)に除障作業がありました。環境委員の皆さんと1・2年生の保護者の皆さんをはじめ、他学年や社会体育関係の方々に参加していただき、感謝申し上げます。子供たちもたくさん参加してくれました。

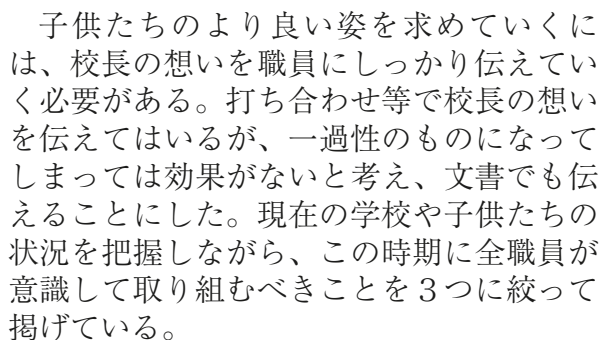
除障はもちろんですが、花植えや観葉植物の観察等もしていただき、学校がとてもきれいになりました。きれいな環境の中で子供たちが生活できることを大変うれしく思います。

保護者や地域の方が知りたいと思っている情報を、受け手の立場に立って発信することを心がけている。様々な教育活動を中心に、子供たちの活躍の様子とともに校長の想いも掲載している。

②毎朝の学区パトロールや学校内の声かけ

自転車での学区パトロールは、登校時の子供たちに声かけができることはもちろんであるが、スクールガードの皆さんや、保

③月ごとの「学校経営の重点」の発行
(職員向け)



本校で研究している英語活動の授業はもとより、初若年者研修授業・初任者授業参観・教育実習生参観授業等を、できるだけ多くの職員が参観できるようにした。参観だけではなくその後の授業検討会への参加や授業準備の協力等、協働性を大切にしない

清掃活動と休み時間に、子供の社会性を育てることを目的に、異年齢の交流活動を導入した。リーダーシップ、フォロワーシップ、思いやりの心の育成を通して、高学年児童の自己有用感や、下学年児童の上
学年児童に対する憧れの気持ちを育てていく。上学年の児童が、下学年の児童のお世話を笑顔でしている様子は実に微笑ましい。

教育も全く同じだと考える。どんな時も頻りに足を運ぶこと。今の自分の目標である。

学校を支える

家庭や地域から信頼され誇りにされる学校の実現にむけて
～地域との連携と人材の活用をとおして～

東金市立正気小学校教頭 いしはら のぶゆき
石原 信行



1 はじめに

正気小学校は、本年度 89 年目を迎える。学区は九十九里平野の中央部、東金市の東部に位置し、緑多い田園地帯にある。子供たちは明るく素直であり、穏やかな雰囲気の中で学校生活を過ごしている。保護者は、近年農業従事者が減少し、会社員や自営業の方が多い。地域住民の学校教育への関心は高く、保護者の学校行事への参加率も高い。

地域の体育協会や、子供会など各種団体の活動が盛んであり、地域の子供たちを地域で育てていこうという思いも強い。

本校の学校教育目標である「自ら学び、心豊かでたくましく生きる児童の育成」の具現化を進める上で、地域の人々との交流や人材活用を行うことは大変重要である。教頭として関係機関や地域の人材との連絡調整に当たっている。

ここでは本校の取組を紹介するとともに、その教育的効果について述べてみたい。

2 地域と連携した学校教育活動の実践

本校では地域の人材を生かすことで特色のある教育活動を教育課程に位置づけている。地域の方々も好意的であり、



ボランティアとの連携

様々な面で協力いただいている。

(1) ボランティアの活用

本校では、「防犯パトロール隊」「こども 110 番」による見守り活動、「読み聞かせボランティア」による朝の読書の時間に絵本等の読み聞かせ、「栽培ボランティア」による学校園の手入れ、「図書ボランティア」による図書室の整備等がある。ボランティアの方々の多くは、自分自身や、子供や孫が正気小学校に通っていたこともあり、積極的に支援してくださっている。

(2) 地域事業所の活用

2 年生の「まち探検」や、5 年生の「職場見学学習」など校外学習では、消防署や郵便局、工場や病院、ショッピングモール、クリーンセンター等の学区内の事業所に協力を得て学習を進めている。これらの校外学習は生活科、社会科の学習として位置づけられている。子供たちは身近に働く人々の姿から仕事の内容を知るとともに、地域を学ぶ機会となっている。

(3) 日本刺繍体験

学区の日本刺繍の工房から講師を招き、6 年生を対象に日本刺繍体験を行っている。9 月から 1 月まで総合的な学習の



卒業証書入れ

時間の中で日本刺繍をほどこした卒業証書入れを作成する。繭から糸をつむぐ「座繰り」

体験や、「糸撚り」体験、刺繍など丁寧な指導を受けている。完成した作品は世界で唯一の卒業証書入れである。日本の伝統的工芸を体験する貴重な機会となっている。

(4)地域の方に学ぶ昔のくらし体験

地区の長寿会、食育改善推進員の方々を招き、3年生を対象として、「竹とんぼ作り」「すいとん作り」体験を行っている。子供たちの中には初めての経験である者も多く、楽しそうに取り組んでいた。昔の遊びやくらしを学ぶとともに、地域のお年寄りと楽しく交流している。



すいとん作り

(5)地域行事への参加

地域の体育的行事として、地区スポレク祭、地区民体育祭、東金市民体育祭、東金市駅伝大会などがある。特に市民体育祭では5年連続地区優勝を果たす等、地区の体育的行事への期待は大きい。大会にむけた練習には、体育協会の方々が積極的にかかわっている。



市民体育祭

また、音楽部は社会福祉協議会主催「ふれあい広場」や、地域の病院の催し物に参加している。日頃の練習の成果を地域の人々に披露する場となっている。

(6)学校運営懇談会の取組

東金市では保護者や地域住民の学校運営への参画と連携強化のため小・中学校に学校運営懇談会を設けている。本校でも地区団長や地域の有識者、保護者により構成された懇談会を年2回開催している。日頃から学校便りや広報の配布、運動会やフリー参観などの学校行事に招待することで学校

の様子を伝えている。懇談会では学校評価や、通学路や施設設備など教育活動に関する意見や、協力・支援をいただいている。

(7)社会に開かれた教育課程の実現にむけて

本校では、人権擁護委員による「人権教室(いじめの問題)」、交通安全協会による「交通安全教室」、外房地区少年センターによる「防犯教室」「薬物乱用防止教室」、幼稚園や特別支援学校との交流授業など学校外の機関と連携した授業を行っている。また、平成29年度は、青少年相談連絡協議会の仲介により、元全日本バレーボール選手を講師として招き、5年生を対象に授業を行った。ゲームや講演をとおして「夢をもつことや夢に向かって努力することの大切さ」を考える貴重な時間となった。専門的な知識や技能を要する外部講師の指導に、子供たちは意欲的に取り組んでおり、より深い学びの機会となっている。



元バレーボール選手による授業

3 おわりに

昨年度着任して、今年で2年目を迎えた。地域から寄せられる期待の大きさを痛感している。地域の人々との交流は、子供たちにとって、地域を理解する機会であるとともに、感謝の気持ちや思いやりが養われる場となっている。子供たちの素直さは保護者・地域に見守られているという安心感に培われたものである。この地域の絆は子供たちの郷土愛を育んでいくはずである。

これからも校長の指導の下、教頭として、地域と学校とをつなぎ、学校教育目標の〈めざす学校像〉の一つである「家庭や地域から信頼され誇りにされる学校」の実現にむけて精一杯努めていきたい。

学校を動かす

教務主任として、今、自分にできること

南房総市立白浜小学校教諭

やすだ たかみつ
安田 隆光



1 はじめに

平成28年度より、本校に赴任して、教務主任として3年目を迎えている。昨年度までの2年間は、4年生と6年生の担任を兼任しながらの教務主任であったため、仕事への時間配分等で苦勞することも多かった。今年度からは、教育計画の立案やその他の校務について連絡調整及び指導・助言を行っているが、改めて教務主任の仕事を見直す場面も多く、やりがいと戸惑いの両面を感じている。

2 学力向上に向けて

南房総市では、毎年4月に市独自で学力調査を実施している。本校では、その結果を分析し、事後の学級経営や校内研修に関連させ、指導に役立てている。更に、校内でも学力向上プロジェクトとして、「授業力の向上」「全校活動の強化・見直し」「職員研修」の3本に取り組んでいる。又、進学先の中学校は、本校の児童しか入学しない分離型小中一貫校である為、お互いの授業参観を含め、中学校との連携も図っている。

3 新任教務主任研を振り返って

年間3回の県総合教育センターで行われた教務主任研修を振り返ってみることが、現在の仕事の立ち位置や今までの活動の意味を見つめ直すきっかけとなっている。

教務主任とは学校の中核を担う存在である。研修では、教職員間のリーダーシップをとる際に役立つ印象深い言葉を講師の先生から頂いた。「出会いと選択が人生を変えること。そして、今、その瞬間、その瞬

間の自分の気持ちを伝えること」である。又、「子供に影響を与える教師その人自身の魅力について、まずは自分自身で考え理解してみること。そして、それを理解したら、今、自分にできることをやってみること。それが目の前の子供や教職員にも良い影響を与えること」である。

教員生活も20年近くを迎える。今までの自分を振り返り、やってきたことを整理して、自分にとって何ができるのか、改めてこの言葉の意味をかみしめ、これからの仕事に役立てていきたいと考える。

4 教務主任としてできること

教務主任としての大きな仕事は、学校の教育活動を円滑に進めることである。まずは、週報のチェックを欠かさないこと。2週間先を見通し、各行事を確実に把握したいと考える。次に学校教育全体の活動の一つ一つにその意味と関連性を考え、各行事の担当者と連携を深めていきたい。その他にも地域での校外活動への参加や若手職員への指導等と多岐にわたるが、まずは、今できることから一つ一つ確実に取り組んでいきたいと考える。

本校の学校教育目標である「共に学び、高め合い、豊かな心をもつ、『活力ある白浜っ子』の育成」を目指して、これからも学校経営の一助となるように、校長・教頭とはもちろんのこと先生方とも連絡・報告・相談しながら、共に取り組んでいきたいと思う。

子どもを知る

一人一人を見つめる

くるみこども園幼稚園教諭 村上結希瑛



昨年度、本園に採用となり、5歳児の補助教諭として勤務した。当初は、補助教諭としての動き方への戸惑いや緊張、不安から、子供と上手に関わることができていなかった。

しかし、初任者研修を受講しながら様々な学びを得た。その中でも、子供一人一人を見つめ「子供を置き去りにしない保育を」という言葉は一番印象に残っている。クラスにはたくさんの子供たちがおり、クラス全体の一人一人の子供を見て保育を進めていかなければ子供をいつまでも置き去りにしてしまうことになる。「保育者の都合で進める保育を行っていないか」と、常に振り返ることの大切さを学ぶことができ、補助教諭として一人一人の段階にあった援助や言葉かけを意識するようになった。

現在は4歳児の担任をしている。一つ下の学年になり、以前よりも一人一人を見つめ直すこと、その日の保育を振り返ることを意識している。また、その子の家庭環境や育ちも考慮した声の掛け方、関わり方を日々学んでいる。

子供が「先生！」と声をかけてきた時は、何かをやりながらではなく目を見て話し、言葉で伝わらなくても感情を読み取り寄り添うことが大切である。これからも教師として責任をもって一人一人の子供と関わっていこうと思う。日々の振り返りが全て子供のためになり、自分のためになることを肝に銘じ、共に成長できるよう精進していきたい。

子どもを知る

夢を与える存在に

印西市立木刈中学校教諭 松村 興佑



要領が悪く楽観的な性格の私は、講師の仕事と採用試験合格のための勉強を両立することができず、合格までに6年を要してしまった。色々なことを言い訳にして、いつか合格できると思い込んでいた気持ちに喝を入れてくれたのは、今まで関わってきた職場の諸先輩方や子供たちの存在だった。出会ってきた子供たちの顔や先輩方の激励の言葉を胸に勉強に勤しんだ結果、念願だった教師になる夢をようやく叶えることができた。有難いことに、講師として着任した木刈中学校にそのまま採用となり、2学年の学級担任を担当することとなった。2年目となる今年は3学年の担任。悩みは尽きないが、今までの経験は決して無駄ではなかったと思えることも多く、子供たちのことで思い悩めるのは幸せなことだと感じながら充実した日々を送ることができている。

昨年の初任者研修で「教師は生徒に夢を持たせなければいけない。」という言葉のある先生からいただいた。我々教師は、その言動や身なりの一つ一つが生徒の心を動かすことを自覚して生徒の前に立たなければいけない。私自身、教師を志すきっかけは、中学生時代の美術の先生の影響があった。夢を叶えた今だからこそ、今度は自分が関わる子供たちに夢を与える存在でいなければいけないと考えている。他人でありながら一番身近な大人の手本として、夢を与え続けられる存在でいられるようにこれからも精進していきたい。

授業を創る

実生活と授業での学びを結びつける



佐倉市立佐倉中学校教諭 細川 ひろみ 浩美

1 はじめに

社会が大きく変化していく中で、家庭の役割も変化し、多様化してきている。その中で、情報があふれ、言葉だけは知っているが、生活体験が伴っていないという実態がある。そこで、情報を整理し、栄養・食品・調理の正確な知識・技能を理解させ、自らの食事を整えられるように、実生活に結びつけていくことが必要だと感じている。

生徒の実態からも、技術・家庭科の目指す『実践的・体験的な活動を通して、よりよい生活の実現に向けて、生活を工夫し創造する資質・能力』を育成することはとても重要である。また、新学習指導要領では「主体的・対話的で深い学び」を目指した授業の展開が求められている。そこで、生徒の興味・関心の高い、調理を軸に食生活の学習を進めていくこととした。

理上の性質について科学的に捉えられるよう題材を工夫した(表)。その結果から感じたことを自分の言葉で表現したり、意見交換をしたりする場面を設定した。

<しょうが焼き> 生徒の感想

肉の焼き方により、縮み方や香り、味に違いがあることがわかった。僕は、強火がおいしかったので、強火でしょうが焼きを作ろうと思う。

② 実験・実習における意見交換は、各自の意見を十分に伝え合えるように4人グループで行い、調理は体験を重視し、技能の習得ができるように1～2人で行った。



だしのうまみの比較

2 授業実践の概要

表 <1年時の実験・実習>

	実習題材	上段：小学校との関連 下段：食品等の比較
1	無機質の学習 ポパイサラダ	ゆでる 小松菜とほうれん草
2	和食の調理 かき玉汁	みそ汁 鯉節、昆布、混合、粉末
3	豚肉の性質 しょうが焼き	焼く、炒める 弱火と強火
4	野菜の性質① 中華風サラダ	温野菜との比較、ドレッシング 生野菜、塩をふる
5	野菜の性質② クリームスープ	ゆでる 水、湯からゆでる
6	調理のまとめ 肉じゃが	※1年生の調理のまとめ 煮えやすさ

(1)実践的・体験的学習

①生徒たちは、出されたものを意識せずに食べることが多いので、各実習題材に、実験・実習を取り入れることで、食材の特徴や調

(2)小・中学校の系統性

小学校では「五大栄養素」を、中学校では「6つの基礎食品群」を学習するが、食品と栄養の関連は容易に理解できる。しかし、家庭実践の少ない生徒たちにとって、小学校で行った実習は知識として理解していても、技能として定着していない生徒もいる。そこで、小学校の学習を反復しながら、新たな学びを加味した実習が必要であると考え、(表)の題材で実習を行った。

<クリームスープ> 生徒の感想

小学校でほうれん草をゆでたけれども、いんげんをゆでてみて、水からかお湯からかで、見た目や味が変わることに驚いた。

(3)食事を整える

中学生にとって、食事を主体的に選んだり、作ったりする機会は少ない。また、社会生活の変化とともに、外食、中食などもあり、作らなくても食事に困ることはなくなっているが、健康な生活を営むためには、自分の食事は自分で整えることが必要である。

- ①献立は「主食・主菜・副菜・汁物が揃っていて、栄養のバランスがとれている」ことは小学校の学習から理解している。朝食は「栄養のバランス」、昼食はこれまでに実習した料理に「様式やいろどり等の諸条件」を加え、夕食は「自分が大切にしたいこと」をテーマにして、3回の授業で1日分の食事になるよう段階を追って、反復しながら献立の立て方を理解させている。
- ②本校の給食は自校方式なので、普段から栄養教諭が各クラスの食生活の実態を把握している。そこで、朝・昼・夕の3回の献立学習には栄養教諭に入ってもらいTTで授業を行うことで、食育の充実も図っている。



栄養教諭との授業

- ③調理実習後毎回、実習した料理を栄養・食品・調理方法の観点からアレンジさせ、簡単に1食分の献立を考えさせている。これを繰り返すことで、食事を整える力をつけるとともに、自分の食生活を意識させる機会となっている。

かき玉汁をアレンジした献立

主食	主菜	副菜	汁物
ご飯	あじフライ おろしポン酢 添え	海藻サラダ	たまねぎ入り かき玉汁

比較の実験・実習をする中で、普段は意識しなかった食材の味や食感を感じたり、食材の特徴を生かした調理法に、生徒は新鮮な驚きを感じたりしている。また、小学校の学びの上に食品や栄養、実習や献立の学習を段階的かつ反復しながら学習を進めることで、身に付けた知識や技能を自信をもって発表・実習できるようになってきている。授業後、実習したものを家で作ったり、「チャレンジカード」(レポート)を提出したりする生徒もいる。今後どのように家庭実践へ繋げ、自分の生活と結びつけさせていくかが課題である。

3 おわりに

授業の題材構成をはじめ、形態については、各種の研究大会を機に、多くの先生方のご意見とご協力を得て、自分自身の授業として形になってきた。生活体験の少ない子供たちが年々増える中、限られた時間で、「何をどう教え」「何をできるようにさせ」「家庭実践にどのように結びつけるか」を考え工夫していきたい。子供たちが、「次はどんな学習をするのだろう」という興味・関心を持って授業に臨み、一つでも多くのことを身に付け、実生活に結びつけられるような授業づくりに、これからも努めていきたい。